

2013 年 マアジ

単位：数量、1000トン、価格、円/kg

年	数 量									価 格						ムロ	アジ	
	漁獲	養殖	産地	輸 入	東京			消費支出 生(%)	在 庫	加工 塩干	産 地	輸 入	東京					消費支出 生(円)
					生鮮	冷凍	塩干						生鮮	冷凍	塩干			
24	134	1.1	93.2	35.6	16.0	0.4	8.7	1,211	31.6	18.2	194	158	535	473	448	1,233	24.0	17.3
25	147		106.7	25.0	16.5	0.4	8.1	1,087	26.1		185	197	517	495	460	1,163		17.8
%	110	0	114	70	103	98	94	90	83	-	95	125	97	105	103	94	0	103

漁獲量と資源

25年の漁獲量は14.7万トンで、前年(13.4万トン)をやや上回ったが、平成11年以降の平均20万～25万トン台を本年も引続き下回る低水準であった。

本年は、主力の東シナ海、山陰沿岸ともやや好調な水揚げであった結果、前年を上回った。

主力の東シナ海及び日本海沿岸で主に漁獲される対馬暖流系群の資源量は、1970年代後半に低い水準であったが、その後増加傾向を示し、1993～1998年には、50万～54万トンの高い水準を維持した。1999年以降はそれよりやや低く、2001年は28万トンに減少したが、その後増加して、2004年は55万トンであった。2005年以降は同水準を保ち、2012年は47万トンであった。再生産成功率は、1990～2000年には変動しながら減少傾向を示したが、2001年に急増した。その後は再び減少傾向を示し、2005～2007年はかなり低い値となったが、2008年以降は上向いた。親魚量と加入量には正の相関があり、親魚量が少ない年には高い加入量が出現しない傾向がある、といわれている。

また太平洋系群の資源量は1990年代はじめまで増加し、高位水準になったが、1996年の16万トンを頂点として減少した。その後2000年と2001年は増加したものの、2004年以降は再び減少傾向となり、2012年は4.8万トンと推定された。親魚量は1984年以降増加し、1992年に最高の6.4万トンとなった後5万トン前後で推移したが、2001年以降は連続して減少し、2012年は2.2万トンと推定されている。

以上のように、太平洋系群の資源水準は低位・減少傾向にあるが、対馬暖流系群は、中位・増加傾向にある、といわれている。

ムロアジ類

大中型まき網のマアジの資源密度指数は増減を繰り返しながらも長期的には減少傾向で推移しており、近年では低い水準にある。マアジを除くムロアジ類の資源密度指数は1990年代前半までは増減を繰り返しながら推移してきたが、1990年代後半に減少し、2000年代前半にかけて低い水準となった。その後、2006～2008年にかけて増加傾向が認められたが、2009・2010年には再び減少した。2012年は2011年より増加した。マアジおよびムロアジ類(マアジ除く)の資源密度指数の相乗平均値は過去約40年間でみると低い水準にあり、最近5年間(2008～2012年)では減少傾向で推移している、といわれている。(近年MAX:1990年 10.9万トン)

産地水揚量と価格（48港）

単位：数量、1000トン、価格、円/kg

海域別水揚量				月別漁獲量				月別価格推移			
海域	24年	25年	前年比	月	24年	25年	前年比	月	24年	25年	前年比
東シナ海	53.6	58.3	109	1	9.78	5.00	51	1	122	183	150
山陰	33.4	39.4	118	2	8.55	5.07	59	2	149	145	97
豊後水道	0.5	0.4	86	3	10.65	5.64	53	3	155	212	137
九州東岸	1.3	3.4	254	4	6.71	4.74	71	4	234	278	119
薩南	1.1	1.2	113	5	14.78	10.60	72	5	161	210	130
太平洋	2.0	3.3	165	6	7.46	14.14	189	6	263	212	81
その他日本海	1.9	0.3	16	7	7.31	12.29	168	7	256	236	92
	93.7	106.3	113	8	5.43	9.40	173	8	285	208	73
				9	5.17	16.09	311	9	242	113	47
				10	5.91	10.78	182	10	199	114	57
				11	7.87	5.52	70	11	158	187	118
				12	4.32	7.04	163	12	202	165	82
				計	93.95	106.32	113	年平均	192	192	100

25年のマアジの水揚量は、10.7万トンで前年（9.3万トン）を下回った。

九州西方海域では、春の盛漁期（4～6月）の5、6月にややまとまった漁獲があったことで昨年をやや上回る水揚をみたが、その後夏場以降下半期は目立った漁獲はなく、秋口から冬場にもピークがみられず、その結果年間水揚げは前年をやや上回った。

また、山陰沿岸では春の盛漁期（4～6月）には昨年同様やや好調な漁況であったが、昨年好調だった1～3月は低調で結果的に上半期は昨年を上回る水揚げになった。しかし秋漁の9月に大漁がみられ、結果的には今年も昨年を上回る水揚げとなった。

太平洋側では薩南海域も含め、東海海域とも前年をやや上回る漁獲となった。

山陰沿岸では、依然、魚体の大きいマアジは少なく本年も周年豆アジ（0～1歳魚）主体で推移し、小型魚は餌に廻る割合が多く、依然型の大きいアジは少なかった。

価格は、185円で全国的に水揚げ増もあり前年（194円）を下回って推移した。

輸 入

25年のアジの輸入は、2.5万トンで近年の5～7万トンの範囲を依然大幅に下回る水準で漸減傾向が続いており、前年（3.6万トン）をかなり下回った。

本年は、オランダ0.9万トン（前年：0.7万トン）、アイルランド0.1万トン（前年：0.7万トン）ノルウェー0.3万トン（前年：0.6万トン）で主力のオランダが数量をのばしたものの、ノルウェー、アイルランドは引続き大きく減少したのが特徴である。また、韓国は0.4万トン（前年：0.4万トン）、台湾は0.2万トン（前年：0.1万トン）、中国が0.02万トンと前年（0.1万トン）で台湾が伸ばしている。

価格は、197円で前年（158円）をかなり上回った。

在 庫 量

本年の在庫量は、2.6万トンと前年（3.2万トン）を下回った。

これは、国内生産の増加を輸入の減少で相殺し、なおかつ生鮮需要、餌料等の需要増の結果である。

消費地入荷量と価格

25年の東京消費地の入荷量は、生1.7万トン（前年：1.6万トン）、冷0.4千トン（前年：0.4千トン）、塩干物は0.8万トンで前年（0.9万トン）であった。鮮魚は増加、冷凍は前年並み、塩干開きはやや下回ったのが特徴である。

本年の1世帯あたりの消費支出は数量、金額とも引き続き減少がみられた。

価格は、生517円（前年：535円）、冷495円（前年：473円）、塩干460円（前年：448円）で、入荷の増減を反映した価格推移となっている。